

③『なぜアメリカはこんなに戦争をするのか』ダグラス・ラミス

比較日本研究会 石積 2003年12月27日

9. 11からイラク戦争まで

今回のイラク侵攻の本質：「テロ攻撃を計画した人々は大きな間違いを犯した」（ブッシュ）そのとおり。しかしテロに対して「戦争」をしようとしているブッシュはさらに大きな間違いを犯している。マイナス・サム・ゲームに入っている。唯一の希望はテロにも報復戦争にも反対する第三勢力にある。

<第一勢力の問題>；

*テロに威厳を与え、一種の正当性を与えた。戦争は国際法の下で許されている正当な行為だ。

国際法は＝戦争法に従う行為が戦争。そうでなければ犯罪。としている。

9. 11は実は大量殺人罪である。戦争をやっていない相手に対して宣戦布告している。

*米政府は国際法を守っていないだけでなく、戦争の慣習も戦争法も軍事戦略の法則も当てはまらない領域に入ってしまう。「敵」には国民も領土も政府もない。そんな戦争で勝利とは何なのか。この戦争にどうやって勝てるか、どうやって終わらせるかはっきりしない。(34)

敵は宣戦布告していないし、宣戦布告できるぐらいの権限ある組織もないようだ(34)

*ザ・テロリストという社会的・法的範疇を作ろうとしている。戦争だといながら捕虜の資格を与えない。新しい範疇が必要となる。テロリストは犯罪者のように「間違った道を選んだ人間」でもない。芯まで悪になっているもの：イーブルは政治法律用語ではない。宗教用語だ。悪魔の勢力。テロリストに対する態度は人種差別に共通する。現在1000人以上の在米外国人がテロリスト容疑者として逮捕されているが、どの牢屋に入れられているかすら公表されない。1700万人の外国人は事実上威厳令下で生活。

*テロル：フランス革命ジャコバン派の暴力的弾圧。基準がない。次に誰が選ばれるかわからない(39) 恐怖..反政府活動家がテロリストと呼ばれるようになったのは19世紀ロシアの革命状態。以来、英語の辞書では①反政府の手当たり次第の暴力②政府による暴力による統治となる。

最近では②が消えているケースが目立つ。角川国語辞典では①恐怖②恐喝③革命の手段としての暴力となり、国家テロは概念として存在しないことになる。

<テロと戦争はどう違うか>

戦争・正戦論：「正しい戦争」わざと普通の市民を殺すと戦争犯罪になる。市民はどうすれば身の安全を守れるかわかる。軍隊に入らない、戦場に近づかない

テロ：安全だという方法ない

*テロルは弱者の戦略といわれているがそれは間違い。20世紀以降飛行機の登場以降はテロルは主に強者、つまり国家が使ったやり方(41)

*20世紀の恐ろしい遺産のひとつ：国家テロに対して鈍感になってしまったこと。1911年イタリア軍のトリポリ、イギリス軍の1915年インド、16年エジプト19年アフガニスタン37年ゲルニカ空襲。その後ドイツ、日本の空襲

*湾岸戦争はクエートとイラクに限定されたが、今度のテロに対する戦争は世界中まで広がりそうだ。言葉としてではなく厳密な政治用語としてこれは世界規模の恐怖政治＝テロだ。

*米国は自らを帝国と意識しない帝国。外交政策は覇権ではなく自由と正義、国際政策は搾取ではなく援助、軍事戦略はテロルではなく防衛と強弁する。

*こういう自己欺瞞を数十年続けると心の中に抑圧された罪悪感が爆発状態になってくるのは当然。自分がやったと自分には意識すらできないほど耐えられないこと、それと同じことをやっている他者を見つけたら、自分の中に溜まった恐怖と怒りから、その他者を攻撃する。悪なのは私でなく、あいつなのだと思えば、精神的に楽になる。米国が攻撃しようとしている「ザ・テロリスト」は米国の他我がであって影である。自分の影を攻撃すればするほどその影は大きくなるばかり。

*これに関するブッシュの重要な二つの発言①「この紛争に中立領域はない」：積極的に支持しない国はテロリストとみなす・・・世界はテロリストとみなされる国であふれるだろう②「この戦争は21世紀最初の戦争だ」：「これは戦争を終わらせる戦争だ」(ウイルソン)と対照的。

*ブッシュの言葉が当たっているだろう。今後たくさんの戦争を生むことになるだろう。

<無限の正義>：神の領域・無限の暴力

第二勢力：「ざまあみろ」論。

*「彼らはなぜあんなに憎まれているかわかっていない」(9, 13ガーディアン、ショウマス・ミルヌ労働部長)世界の金銭や貿易制限を書き直し、世界の隅々にまで軍隊を送り、アフガン、ユーゴ、スーダン、イラクを空爆

し・・・9, 11は怒りと憎しみにあふれた文章を書く適切な好機。

アメリカを憎んでいるのは彼ではなく、ほかの人だ。といっても彼の文章には一行一行憎しみがしみこんでいる。自分の怒りを表に出さないで人の怒りを借りるのは卑怯。テロリストの動機や大義名分はブラックボックスになっている。

- * 「アメリカの以前の犯罪を考えれば、今度の攻撃を受けるに値する国だ」と公然と言う人は少ないが、それよりも「アメリカ政府の外交政策によってテロ行為が生まれる世界構造ができた」

「犠牲者はアメリカ外交政策の犠牲者」という言い方は広く流布している。

<「ざまあみろ」論からの二つの問題の立て方>

- ①世界に不正が残っている限り、正義のために戦う人が必ずいる。：ブラックボックスの中身が公開されたときがっかりするだろう。犯人たちの目的は第一：たくさんの人を殺す第二：世界中を戦場にする
- ②アメリカが暴力的であるから抑圧される側も暴力的になる。ほとんどは弱者を食い物にして自国で凶悪犯罪人になるがたまには自分を作ったアメリカに対して暴力的に攻撃することもある。

アメリカの暴力的外交政策は暴力的な政治家や活動家を次々に作ってきた。キューバでバチスタ、ニカラガでソモサ、チリでピノチオ、ジエム、マルコス、ノリエガ。今回のテロリストはチモシー・マクベイとおなじ。つまり世界の貧しい人々の怒りをまったく代表していない。

第三勢力：世界の圧倒的多数

<なぜアメリカは戦争をするのか>

- * アフガン戦争：国際法に違反、国際法は正義の戦争を認めるが、この戦争はそれに違反する。

国際法が元に戻らなくなる。犯罪に対して戦争はできない。①ビンラデンとテロの証拠いまだなし。②タリバンはテロについて事前に知らず③テロの実行犯にアフガニスタン人いない。

- * なぜアフガンと戦争？：「ビンラデンを引き渡さなかったから」・・・それではフジモリをペルーに引き渡しているか
- * タリバン政権は①ビンラデンの証拠がほしい②イスラムの第三国に引き渡しても良いといった。③アフガンで裁判しても良いといった・・・これらは外交として常識

どうやらアメリカはビンラデンを引き渡して欲しくなかったようだ、なぜならテロを犯罪としてではなく戦争として扱いたかった。戦争だと面倒なことはない(たとえば法廷でアメリカについてビンラデンが何を語るか)

- *この戦争(アフガン)に反対するために平和主義者にならなくても良い。その理由：勝てない戦争をすべきでない。勝者のいない戦争だから。アメリカは世界規模でのイスラエルになろうとしている。
- *「この戦争は私たちが死んだ後も続いているだろう」(アメリカ政府高官)「ポストベトナム症候群」。右翼から見れば戦争が嫌いというのは病気、グレナダ、パナマは小さすぎて治療にならず。湾岸戦争は短期間過ぎた。
- *アメリカは国内問題を解決するために、日本は平和勢力をつぶすために戦争を利用

<新しい帝国>

アメリカは変わった

- *外務省沼田大使がそれがうそだとわかった上で「大量破壊兵器うんぬん」を言い続けているのか、それとも米政府のうそを素直に信じているのか。だましているのか政治状況を把握する能力がないのか。どうやら後者らしい。後者のほうが恐い。
- *中宗根沖縄市長の発言「基地は戦争を抑止するためである。戦争を仕掛けるものであってはならない」。どのような国の政府が、どういうつもりで嘉手納基地を管理しているかを、当の沖縄市長はまったく理解していないようだ。その時代はずれ。
- *日本政府が日米安保条約を結んだ国とは違う。プッシュは封じ込め政策を捨てて先制攻撃政策を選んだ。

<現実主義のすすめ>

- *北朝鮮としては、何もしなくても攻撃されるかもしれないと考えた。それは妄想でなく、まったく現実的な恐怖。核の抑止力。このやり取りからはっきりしたメッセージは、やっぱり小国は核を持ったほうが安全だということ。
- *現実的に今の日本にとってのもっとも深刻な脅威：アメリカが北を攻撃すること
- *新ガイドライン法と関連法は北侵略のためにあると公言しているがこれは間違いではない(107)

<保守について>

* アメリカのネオコン勢力には保ち守る精神はまったく見えない：例えば自然環境、例えば法、その延長線上での国連、国際刑事裁判所・・・ブレーンは自分たちがやっていることが従来の国際法に違反している、つまり戦犯だとわかっているのだ。何世紀にもかかった国際法のもろい構造を破壊し始めている。一年半でかなり進んだ「国家主権尊重」「内政干渉禁止」「平和に対する罪」そして国連そのもの。

<正義と狂気>

* 安保条約が結ばれてから米国は変わった。当時は国際法を守る、国連を尊重、先制攻撃は避ける、封じ込め政策を中心とすべき、といていた。安保支持者はそのような了解を前提に支持。

(1950年60年の安保条約の前文・条文は国連重視。国連中心主義と日米同盟は矛盾しない構成となっていた。)

新しい帝国

比喩としてではなく(60年代に多用され、その後も多国籍企業などの世界支配との関連で使われた)、言葉の正しい意味での帝国。帝国のイメージは19世紀の大英帝国でなく古代ローマの帝国。

<戦争をする国の社会はどうか>

* 普通の国(普通の大国)の市民は：男の子が大人になるということは人を殺せる人間になること。アメリカの不可解な軍国主義の根底には一人前の人間教育の動機があるのだ。平和憲法の日本社会とは根本的に違う。囚人が500万人。なぜこんなに暴力的になったのか。銃の保持か？そうではない。
* 「戦争の暴力が国内に帰ってくる」ことを考えたくないで軍隊の暴力を見ないで社会の暴力化だけを問題にしている。普通の人にはよほどのことがないと人を殺せない。しかし軍の教育：逃げない、考えない、殺せる。が必須。
* 自衛隊派遣はそれで終わりではなく日本社会そのものものが変わる。男の子の生き方そのものものが変わる。

(ここに現代若者論との連動がある。現代若者の無気力、軟弱さ、モラトリアム精神を指摘する層と憲法改正論者の層がオーバーラップする構造がある。当の若者に、しかも相対的に社会意識の高い若者に「ビシッとした社会」を求める空気がある。現在、社会意識の高い若者こそが小林よしの

りに傾倒すること見過ごしてはならない。)

<正義の戦争はあるのか>

- * 「正義の戦争はない」と主張することは容易でない。国際法は「正義の戦争はある」という前提に立っている。国連憲章もそう。戦争犯罪を裁く(東京裁判、ニュールンベルク、ユーゴ・ミロシェビッチ)ということは逆に言えば犯罪でない戦争はあるということの意味している。
- * 正戦論を信じているのはアメリカやNATOだけではない。毛沢東、ホーチミン、ゲバラ、アラファト、マンデラみなそう。ガンジーのインド独立運動を除いて帝国主義反対闘争、反植民地闘争すべて正戦論にたつ
- * 17世紀キリスト教信者からすべての戦争は犯罪だという声上がる。これに対して正しい戦争と正しくない戦争を区別すべきという考え。グロチウス「国際法の父」正義の戦争の条件: @目的:防衛OK、植民地独立OK 方法: 宣戦布告、非戦闘員の殺戮、残酷な武器の使用
- * 正義の戦争すら否定しようとするのなら きれいな戦争などない(しかし正戦論そのものの否定にはならない) あらゆる戦争行為は悪である。と論じなければならない。
- * しかし正義の戦争があるからこそ問題は難しい。正義の戦争はないと言い切ることは独立戦争を戦っている人たちに「戦争をしてはいけない」ということ。これ困難。

<「安全」「安全保障」を中心に考えることで正義の戦争を論破できる道があるかもしれない。>

* 軍隊は人々の安全を守らない。かえって危険だ。20世紀1億8千万あるいは2億の人々が国家によって殺された。大半は味方の軍隊によって殺されている。軍隊は自国民しか殺さない国も多い

(フィリピン、中南米、アフリカ)コスタリカの場合、軍隊は国民の安全を守るために邪魔になるから軍事力を持たない、という考えかた。強い軍隊を持てばその国の安全は守られるか?

近代の日本を例に検証できる。

<どこまでもついて行く日本>

日本が戦争をできるようになるまで

- * 「交戦権はこれを認めない」: 主権者である国民が日本政府に対して認めないといっている。
交戦権とは自衛のために戦争する権利である。これを認めないといってい

る。改憲(9条)反対とはじつはこのことである。ここのところをあいまいにしてはいけない。容易ではない。これが重要。

*兵士にとって「人を殺す権利」は重要。これは国家の命令によってやったのだから犯罪にならない。

法的に起訴されることがない。社会的に指弾されることがない。人をたくさん殺した人は連続殺人犯ではなく、逆に勲章をもらえる。交戦権とは不思議な国家の魔術。

*PKO協力法刑法36条(正当防衛)37条(緊急避難)これは日本国にいる人間すべてが持っている権利

*周辺事態法による後方支援は別：国際法上は交戦する一方の国に物資を運んでいる自衛艦は参戦していることになる。民間の貨物船といえども非戦闘員の資格を失う。

*軍人に人を殺す権利を与えるかどうか？与えれば平和憲法の最後の砦が崩れる。

*ところで周辺事態法第9条は何か。戦争になったら政府は地方自治体と民間組織に「必要な協力を求めることができる」、その意味では、どちらの9条に従うか、中立領域はない。